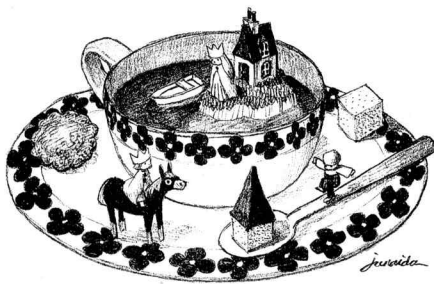


朝日 歌壇 俳壇



〈日曜日のブローチ 24〉 junaida

音のみの波また波の去年今年 澤好摩
近刊の『澤好摩俳句集成』（ふらんす堂 所収の句集未収録句。「去年今年」は年が改まること。「音のみの波」は夜か。誰も見るものない暗い海面の「波また波」。散策する新年の情景を、暗潮としかも平易な言葉で描いたこの句は二〇二二年の発表。澤は翌三年、旅先での転倒のため七十九歳で急逝した。前衛的な作風で知られる高柳重信の高弟と目される澤の句は、しばしば伝統的

い伝統的な作風の私に、心象性の高い句を薦めたのは、澤の見識だったのだ。時明りまず一骨を動かさん 志賀康 近刊の『志賀康俳句集成』（文学の森 所収の未刊句集より。「時明り」には辞書的な意味があるが、それよりも「星影を時影として生きてをり 高屋窓秋」を連想した。「時」を「時影」「時明り」すなわち光として意識しながら刻一刻と生き続ける存在。何もかもそぎ落とした「生きてをり」と比べ、「一骨を動かさん」には自身の肉体の感触が残っている。窓秋、康の句はいずれも無季。季節を超えた句境だ。（俳人）

い伝統的な作風の私に、心象性の高い句を薦めたのは、澤の見識だったのだ。時明りまず一骨を動かさん 志賀康 近刊の『志賀康俳句集成』（文学の森 所収の未刊句集より。「時明り」には辞書的な意味があるが、それよりも「星影を時影として生きてをり 高屋窓秋」を連想した。「時」を「時影」「時明り」すなわち光として意識しながら刻一刻と生き続ける存在。何もかもそぎ落とした「生きてをり」と比べ、「一骨を動かさん」には自身の肉体の感触が残っている。窓秋、康の句はいずれも無季。季節を超えた句境だ。（俳人）

第71回角川俳句賞 角川文化振興財団主催。埼玉県の千野千佳さん(41)の「愛嬌」(50句)に決まった。鈴木牛後句集「酩酊の色」 2019年から23年までの372句を収めた第4句集。総ルビを採用した。「ひたるさや鴨草は酩酊の色」「黒牛に黒い髪艶然波来る」「いとど出てくる住み古りし貌をして」(書肆アルス・2200円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があり、郵便での投稿は無地のほかがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます。

人生を狂はす戦敗戦日 (石川県能登町) 瀧上 裕幸
鬼やんま故郷の山河連れて来る (静岡市) 松村 史基
村の音消えて銀河の残りたる (岩倉市) 村瀬みさを
この星に生きるほかなし秋暑 (長野市) 縣 展子
鰯雲空に言葉のある(と) (蒲田市) 秋川 一水
桐一葉二度と戻らぬことあまた (東京都足立区) 望月 清彦
高齢者となりて久しき花野かな (福岡市) 財津美智代
花野ゆく不登校の子連れ出して (いわき市) 中田 昇
墓洗ひ独りとなりしこと伝ふ (多摩市) 金井 緑
戦前も戦後も続く秋の空 (藤井寺市) 横内 正人

【評】第1句。正に「人生を狂はす」戦。多くの人が傷つき尊い命を奪われた。再び戦争をしてはならない。第2句。「鬼やんま」を見ると「故郷の山河」を思い出す。懐かしい。第3句。村は寝静まり空には銀河が輝いている。静かな時間の流れ。

新涼のスポーツ刈りにしてみたよ (本庄市) 篠原 伸允
チキユウジンハンディファンヨナイズウス (東京都府中市) 古川 泰
野分あと橋の匂ひのどこよりぞ (越谷市) 新井高四郎
葉包のあとは折鶴白芙蓉 (横須賀市) 渡辺伊世子
神主が田に領巾振るや虫送り (京都市) 室 達朗
子らみんな翼もちをり運動会 (金沢市) 岩本 卓夫
夜学にも移らずやめてゆきかな (大阪市) 今井 文雄
車両基地整理静止星月夜 (横浜市) 大久保透美
優勝に人通り絶え秋麗 (那覇市) 上江洲一石
ぐりとぐら読んでぐり子らの星月夜 (新潟市) 田丸 信子

【評】篠原さん。簡単な事を簡単に言って抜けのよい句になった。古川さん。球を偵察する宇宙人から本星への報告の打電!? 新井さん。攪拌された空気、土植物の匂い。渡辺さん。清澄。折鶴と白芙蓉の物質感の近さには一考の余地あり。

台風のせむにしようと思ふ (川崎市) 丸田 征男
開け方がわからない秋の入口 (大和郡山形市) 富野 香衣
心なしか弾んで見える稲刈機 (長岡市) 柳村 光寛
大方は裏給つまらぬ団扇かな (神戸市) 岩川 早苗
うづこ雲気つけばいつも少数派 (西宮市) 平田 あい
動き出しさうな葡萄の食ひ残し (大野城市) 野分 のわ
ふる雨に松茸入りの茶碗蒸し (東金市) 村井 松澤
淋しさに月見パーカー頼張りぬ (広島県熊野町) 中村 竜哉
帰宅してシャワーの後に桃のあり (千葉市) 長谷川 べぐ
夕まぐれ案山子は家へ帰れない (町田市) 岩見 陸二

【評】一句目、遅刻とか、提出物が出来てないとか。二句目、猛烈な残暑にうざりしていた今年の実感。三句目、一年ぶりの出番が来て、やる気十分とは頼もしい。九句目の何とも幸せな帰宅があると思えば、十句目の案山子には申し訳ない。

花すすき手折れば花が舞ひにけり (東京都世田谷区) 松木 長勝
虫籠にふるさと少し持ち帰る (尾張旭市) 古賀勇理央
大きくて小ぶりを選ぶ秋刀魚かな (福岡市) 満重 勇二
桃食つてふぐりのことき種残る (広島市) 谷口 一好
秋晴やミットに刺さるストリート (尾張旭市) 石川 盛久
秋めくや厨のなかに山の幸 (長崎市) 下道 信雄
がつつんと大きな音や金亀子 (玉野市) 加門 美昭
夏痩せて午後の芝生のおをむなり (横浜市) 小林 瑞枝
海眺め歩く六甲涼新た (大牟田市) 志岐 鈴恵
マルクスと芭蕉の並ぶ雲の峰 (箕面市) 櫻井 宗和

【評】一席。はらりと解けたばかりのススキ。月もよきころ。二席。虫籠の中。虫か草か。夏の句だが、ささやかな秋の気配。三席。あまり大きすぎても困る「小ぶり」の一言がおいしそう。十句目。いずれ劣らぬ入道雲。偉人のような